

ふるさと Something NEWS

第5回

連載・蓄エネ・イベント

北へ、南へ、日本国へ ——(その二) 函館の旅

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人 e f c o . j p
代表理事 佐藤建吉

▼観能に、
東京・千駄ヶ谷へ

この3月9日、東京の国立能楽堂(渋谷区千駄ヶ谷)で狂言と能を観た。能の題目は「桜川」。日向国(宮崎県)で母子で暮らす二人。生活苦の母を思い自らの身を人買いに売る息子(名は桜子)。それを知った母は子を探して、西へ西へと旅立つ。3年後、桜の季節に、常陸国(茨城県)の桜川に来て、川面の桜の花びらを、なりふり構わず網で掬っている狂女と化した母。花びらが桜子かと思つたこと。

▼冬の北海道・函館へ

観能の夕方、17時20分に東京駅から新幹線へ、函館に向かった。JR東日本の大人の休日チケットを利用して。新幹線の新青森駅を超えて、青函

「桜川」では、花見の仲間がおり対面する。観客が涙を流す場面がある。この観能会は、千葉真陸沢町の歴史民俗資料館の久



北方四島もしっかり警備。各藩の警備地図(1860年)

野一郎館長が企画して、20年間も続いている恒例の町民バス観能ツアーである。その一行は、能の台詞とその意味、さらに場面展開について、バスの中で説明を受けているので観客の中でも一番の通になつていく。今回は「桜川」を観ておけば、地元での花見のときに一興となるだろうとの企画である。誘いを受けた筆者自身も共感した。

トンネルを初めて通過した。世界最長53・85キロの青函トンネルは、開業30周年であるという。このトンネルは、シールドマシンで掘削されたが、世界最初のシールド工法の特許は、イギリスのエンジニア、マーク・ブルネル(1769年~1849年)によって発明された。ブルネルの子イザムバードはトンネル、鉄道、船、橋などの機械土木エンジニアで、挑戦するエンジニアと呼ばれている。筆者は、彼を紹介する研究や著作をしてきたので、今回の青函トンネルの経験は、感慨ひとしおであった。



飛行機雲の白い軌跡と五稜郭タワー(五稜郭から撮影)

「黒船来航」の翌年、1854年に日米和親条約が締結され、箱館と下田が開港された。その年に、イギリスとロシア、その翌年にはオランダとも和親条約が結ばれたことにより箱館は国際都市に変貌した。蝦夷地(北海道)の警備のため、江戸幕府は箱館奉行所を元町(箱館山麓)に設置した。その後、奉行所は大砲攻撃などに備えて内陸の亀田の地に移転することになった。その周りを、星形五角形の堀と土塁を廻らすことが計画された。五稜郭とは、その形からの名

新函館北斗駅で函館線に乗り換え、函館駅に着いたのは22時30分。5時間の北への夫婦二人連れの旅であった。驚いたのは、予想に反して函館に雪がないことであった。東京からセーター姿で来たが寒くもない。40年前に体験した冬の函館は、顔面が痛くなるほどの寒さであったが…。

旧幕府軍副総裁の榎本武揚らは、旧幕府からの脱走者や諸国からの応援者3000人からなる旧幕府脱走軍を組織し、軍艦や輸送船8隻で、函館に上陸した。旧幕府軍の大島圭介と新選組副長の土方歳三の二手に分かれて、五稜郭に入城した。その後の反撃で、旧幕府脱走軍も翌年の明治2年(1869年)5月に降伏した。戊辰戦争は最終的に、旧幕府軍の勝利で終わった。この前後の歴史は、いまなお函館の街のいたるところに残されている。北の函館の旅は、函館市電の魚市場通で下車し、はこ

▼星形城郭の五稜郭へ

函館は、はじめは箱館と呼ばれていた。アメリカのペリー提督による

▼動乱期の五稜郭の宿命と貢献

五稜郭は黒船来航による我が国の動乱期と深く関係している。明治維新は、1868年4月11日に大政奉還により行われたとされているが、幕藩体制であったので、強力な反対藩もあった。東北の会津藩や庄内藩、さら

技術や工法がいたるところにあることを知り、その紹介ビデオを、筆者は記録に購入した。北へ、函館に向かった理由には五稜郭を訪ねたいという気持ちがあったが、思わぬ成果が得られた。

今回の旅は「桜川」の時代とは違い、新幹線に乗り、北へ、海を越えて、一気に北海道に渡る。お函館の街のいたるところに残されている。北の函館の旅は、函館市電の魚市場通で下車し、はこ

銅像があるが、当日の夕方の上空には太陽の下、白い飛行機雲が、彼らの思いの現れのように、伸びていた。

▼旅は、北へ南へ

今回の旅は「桜川」の時代とは違い、新幹線に乗り、北へ、海を越えて、一気に北海道に渡る。お函館の街のいたるところに残されている。北の函館の旅は、函館市電の魚市場通で下車し、はこ